KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

KYOKYO 126

特　集　京都教育大学地域スポーツクラブ

京都教育大学

＜表紙＞

『私の見た桃山城』

附属桃山中学校　１年　林　実希

本校の東に位置する伏見桃山城。入学して最初の校外学習は、徒歩20分の場所での写生会です。集中してしっかり観察でき、最後までていねいに仕上げることができました。力強くてずっしりとした大きな伏見桃山城が、画用紙いっぱいに表れました。

＜裏表紙＞

『私の見た桃山城』

附属桃山中学校　１年　帰国生徒教育学級　海道 世里奈

アメリカから帰国した生徒の伏見桃山城、お城の特徴がしっかりとらえられていて、ていねいな仕上がりになっています。

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation
NIAD-UE
UNIVERSITY
ACCREDITED
Mar.2007

CONTENTS

広報第126号

＜表紙＞　附属桃山中学校　１年　林　実希
＜裏表紙＞　附属桃山中学校　１年
帰国生徒教育学級　海道 世里奈

特集

2　京都教育大学地域スポーツクラブ
体育学科准教授　榎本　靖士
教務補佐員　杉本　和那美

海外見聞録

7　「上海師範大学短期研修」同行記
社会科学科教授
田岡　文夫

留学生の声

9　楽しい振り返り
日本語・日本文化研修留学生
BOPOSHOVA Aizada
ボポーシェワ　アイザーダ（キルギス出身）

研究余滴

10　東アジアの語り物音楽
―義太夫節・パンソリ・評弾の
音楽的特徴に関する比較研究―
音楽科教授
垣内　幸夫

京教今昔物語

12　ホケカン10年一昔
保健管理センター所長
中村　道彦

京教学内探訪

14　就職・キャリア支援センター
／学生課の紹介
学生課長
石坪　辰男

附属学校園だより

16　小中一貫学校がスタートしました
京都教育大学附属京都小中学校副校長
橋本　雅子

17　全国インターハイ3位入賞
（全国高等学校総合体育大会、陸上競技）
附属高等学校副校長
斉藤　正治

18　ロボカップジュニア世界大会3位
（サッカーチャレンジAセカンダリー部門）
附属高等学校副校長
斉藤　正治

19　キャンプ学習
附属特別支援学校副校長
春原　克彦

新任の先生から

20　教育学科准教授　伊藤　崇達

20　家政科准教授　深沢　太香子

卒業生の声

21　壁をのりこえて
京都市立安朱小学校教諭
岡田　亜希

21　立場が人をつくる
附属京都小中学校社会科教諭
西田　直記

ようこそ大先輩

22　気づきから学ぶ
昭和38年度　第二社会学科卒業
京都教育大学同窓会事務局長
市原　時夫

読者の皆さまへ・編集後記

23　地域連携・広報委員会委員長
武蔵野　實

京都教育大学地域スポーツクラブ

体育学科准教授　榎　本　靖　士
教務補佐員　杉　本　和那美

1．はじめに

近年、日本におけるスポーツ活動は、多世代、多種目、多志向と多様化しています。しかし、スポーツ施設や指導者は十分とはいえません。そこで、国は平成12年にスポーツ振興基本計画を公布し、総合型地域スポーツクラブの設立によって様々なスポーツ活動の広がりを期待しました。しかし、欧米のように地域でスポーツをする環境はなかなか進まず、子どものスポーツはやはり学校における指導者は学校教員が務め、学校のスポーツ施設を利用した運動部活動が中心になっています。

京都府でも国の動きを受けて、平成17年度にアクションプラン「生涯スポーツ社会実現プラン」を策定し、この中で京都ならではの総合型地域スポーツクラブの立ち上げということで、大学や府立高校の施設や人材を活用したクラブ作りを目指しました。その一環として本学においても総合型地域スポーツクラブの立ち上げについて打診があり、平成18年9月に学長の委嘱により設立検討委員会が結成され、設立の是非について検討されました。12月には設立について概ね前向きな意見が報告され、平成19年2月には設立準備委員会が設置され、4月から京都府の援助を受けながら試行期間として地域スポーツクラブの活動を開始しました。そして、平成19年11月10日に設立総会を実施し、理事を選出し、故原田明正先生に会長に就任していただきました。名称を「京都教育大学地域スポーツクラブ」（呼称「KYO^2（キョウキョウ）クラブ」）としましたが、学外団体として大学と協定を結んで学内施設を利用した活動を行えるようにしています。平成20年4月から京都教育大学地域スポーツクラブとして正式に活動を開始し、事業はスポーツ教室として小学生向けの陸上競技教室、サッカー教室、成人向けのランニング教室、イベントとして駅伝大会を行いました。小学生向けのスポーツ教室は平成21年度から体操教室、平成22年度からはバスケットボール教室をスタートさせています。

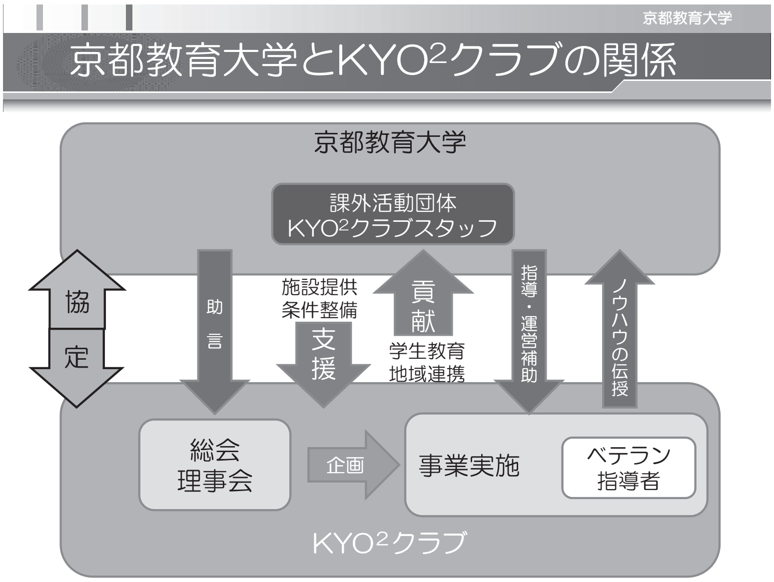
平成21年度の会員数は324名、平成22年度の会員数は7月現在で291名です。

2．京都教育大学地域スポーツクラブ概要

（1）小学生陸上競技教室

平成19年度から開講された小学生陸上競技教室。毎年100名以上の子どもたちが参加しています。年間20回の教室が開かれ、走・跳・投の動きを学年ごとにグループに分かれて練習を行っています。教室の中で、体力測定として50m走、立幅跳び、ソフトボール投げを計測し成長過程を記録しています。また、京都陸上競技協会が主催する小学生を対象とした大会にも出場し、自己記録更新を目指しています。

学生スタッフは子どもの発達段階や運動能力を考慮



しながら練習計画を立て、実践的指導力を養っています。指導するだけでなく子どもたちへの振り返りカード（学習記録用紙）や保護者への連絡プリントを作成し、会員とのコミュニケーションを図っています。また、自分たちの活動内容を振り返るための練習日誌を残し、次回あるいは来年度の活動に役立てています。

また、有名選手や指導者をお招きし、子どもたちだけでなく学生自身のパフォーマンスや指導力向上を図っています。昨年度は、谷川聡先生（筑波大学・110mH日本記録保持者）や田内健二先生（早稲田大学・2009世界陸上やり投げ銅メダリスト村上幸史選手の科学サポート担当）をお招きしました。

（2）サンガ小学生サッカー教室

サンガ小学生サッカー教室は、平成20年度からKYO^{2}クラブと京都サンガF.C.が連携して実施しています。チーフコーチに、Jリーガーとして活躍された後、現在は京都サンガ普及部コーチの成山裕治先生を迎え、京都教育大学サッカー部所属の学生がアシスタントコーチとして子どもたちの指導にあたっています。この教室では『ボールを使った遊びを通して子どもたちの基礎運動能力やサッカーの基本技術の発達を促進』と『成長に応じたさまざまなグループ活動を通した仲間作りと自立心の育成』を目標とするとともに、『将来教員を志す学生コーチの実践的な指導力の向上』を目指しています。教室は毎週木曜日16時半から、1回90分の練習を実施し、7回を1まとまり（クールと呼んでいます）として年間3クール開催しています。活動形態は、参加者を学年や能力に合わせて3～4グループに分け、各グループに3、4名ほどの指導スタッフを配置して、子どもの成長に応じたきめ細かな指導を行っています。成山先生から学生にサッカーを通しての子どもとの関わり方、細かな指導方法を丁寧に教えていただいています。さらに、学生自身が指導方法や子どもとの関わり方を学ぶためキッズ講習会を京都サンガF.C.に開講していただき、それを受講することでより一層の指導力の向上に取り組んでいます。

（3）小学生体操教室

平成21年度から開講した小学生体操教室。開講当初は受講者数が12名、指導者が10名とほぼマンツーマンでの指導で、子どもたちはのびのびと大学の体育館で体操競技を学習していました。学生の熱心で親切な指導が伝わり、今年度は40名の定員いっぱいで行っています。

教室は毎週水曜日16時半から1回90分の練習を行い、6回を1クールとし、年間3クール開催しています。昨年度は学年や習熟度別に3つのグループに分かれ、全体で準備運動をした後、マット・跳び箱・鉄棒・トランポリンを中心に練習を行いました。また、クールの最終回にはグループ合同の発表会を行いました。子どもたちには、体を思いきり、のびのびと動かすことの楽しさや心地よさを体感して欲しいと思って

います。教室での活動を通して、できるようになった！という達成感を味わい、次はこんな技に取り組みたい、という前向きな姿勢を身につけてもらいたいと考えています。また、技術面だけでなく、体操教室を学校とは違った学びの場として捉え、順番を守る、話をきちんと聞く、友だちを応援するといったことも指導しています。

(4) バスケットボール教室

今年度開講したバスケットボール教室。昨年度までは他の教室に参加していた子どもや、バスケットボール教室の開講とともにKYO^{2}クラブに新しく入会してきた子どもなど、バスケットボールを通して子どもたちは仲間の輪を広げています。

教室は毎週水曜日16時半から1回90分の練習を実施し、7回を1クールとして年間2クール開催しています。練習内容は、全体で一人ずつボールを持ち、ボールを扱う感覚を身につける練習を行い、その後グループに分かれ技術練習を行います。教室の最後には学習した内容を盛り込んだゲームを行い、練習の成果を試す場を設けています。また、「ハンドリングマスターへの道」と題した練習課題があり、休憩時間や練習の前後に子ども一人ひとりが学生スタッフにチェックしてもらって自分自身の上達度をはかっています。

11月から第2クールが始まります。ボールをつくことが苦手な子でもみんなと練習することに加え学生スタッフの丁寧な指導で、ぐんぐん上達しています。

(5) ランニング教室

「目指せ！ホノルルマラソン完走」をテーマに、ランニング学会が主催、㈱大塚製薬が協賛する「アミノバリューランニングクラブin京都」が平成17年度に京都教育大学を会場として開催されました。会員数は平成17年度40名、平成18年度80名、平成19～21年度は130名もの方が参加されました。今年度はKYO^{2}クラブ独自の「ランニング教室」を開講し78名の方が参加されています。アミノバリューランニングクラブ開講当初から陸上競技部中長距離部員が学生スタッフとして指導補助にあたってきました。現在では、卒業生がランニング教室のコーチとして再び指導してくれている人もいます。

ランニング教室では、初心者からフルマラソンに何度も出場されている方、10～60代まで老若男女問わず参加しています。レベル別のグループで練習を行い、各グループに学生スタッフが入り指導しています。練習だけでなく懇親会を開き会員と学生との親睦も深めています。学生には社会との交流の場としても非常によい機会になっています。

(6) 藤森駅伝大会

今年度で第52回を迎える藤森駅伝は、第49回大会までは京都教育大学体育会が主催となって行われていた歴史ある大会です。小学生の部（5区間:8.3km）と一般の部（5区間：11.2km）があり、第50回大会はそれぞれ53チーム、14チーム、第51回大会は65チーム、26チームと年々参加チームが増えています。第51回大会からはチップシステム（自動タイム計測機）によるタイム計測を行い、正確でスピーディーな計測が可能になりました。参加チームには、KYO^{2}クラブの会員チームや、近隣の小学校チーム、地元の有志によるチーム、地域のランニングチーム、京教大の学生チームなど多世代の方々が参加しています。コースは最長区間でも一般の部で3.0kmと短く、得意不得意に関わらず気軽に参加できます。今年度は11月3日（水・祝）に行います。紅葉で色づく京都教育大学構内を仲間と襷をつないで走ってみませんか。

(7) 運営について

KYO^{2}クラブの運営には大学関係者（教員、職員、学生)、本学OBの教員、地域の方、教育委員会関係者など様々な方が関わっています。

KYO^{2}クラブ事務局がクラブの運営を行っており、学生スタッフが月・水・金の15時～ 18時の間、様々な業務をしています。会員登録や電話・FAX・メール等の対応といった会員管理や会員連絡に関すること、教室の企画や広告、会報の発行といった広報に関すること、各教室の指導者や学生スタッフと連携をとって各教室の運営に関することを学生スタッフで行ない、さらに総会や理事会などの会議にも参加してKYO^{2}クラブ全体運営に関することなどにも関わっています。クラブの維持・発展に関わるたいへんな仕事を、運営関係者や会員と協力して行なうことで、教員や社会人として即役立つであろう企画・運営力を養っています。

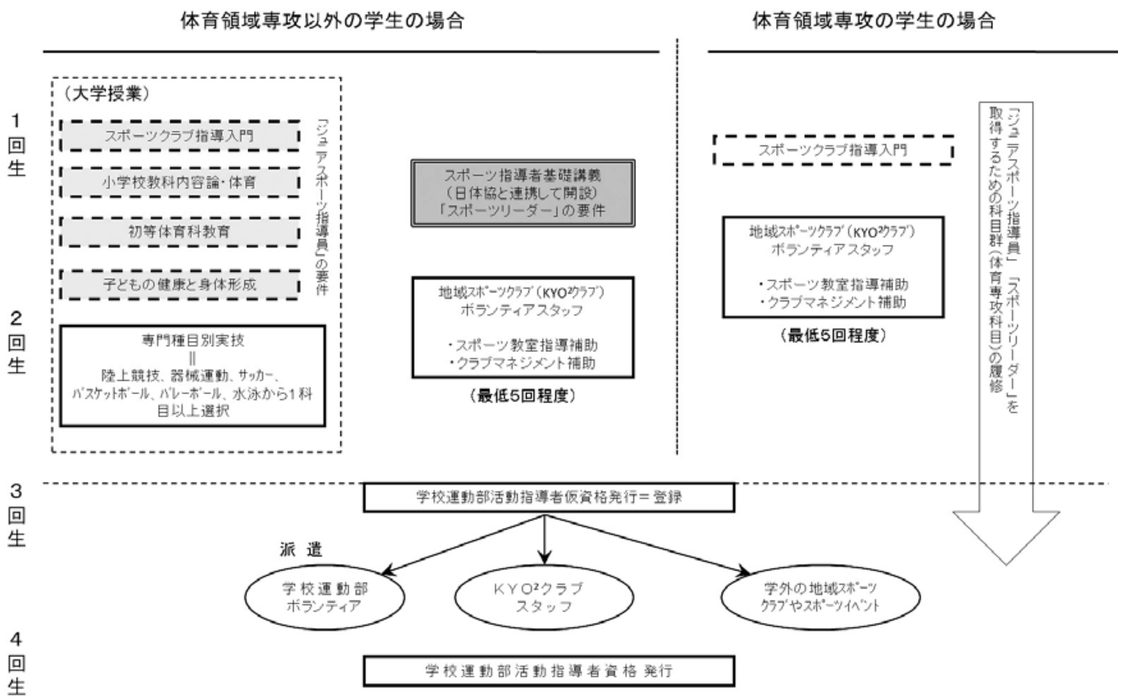
3. 運動部活動指導者育成事業

京都教育大学地域スポーツクラブを学生の教育の場として発展させるため、「運動部活動を運営・指導できる教員養成プログラムの開発と指導者支援ネットワークの構築－地域スポーツクラブ及び退職教員を活用した運動部活動指導者資格の認定とその支援体制の構築－」を平成21年度から3年間事業化しています。これは、学校運動部活動や体育・スポーツ的イベントなどを適切に運営、指導する力量は、保健体育の教員ばかりでなく、全教科の教員に必要とされることであるにも関わらず、それを教員養成において学習する機会がなかったことから、これまでのおそらく運動部活動経験などで自然と学んでいたよい点や、教員になったのちに教員間で引き継がれていたノウハウを段階的、総合的に身につけさせようとするものです。

学校現場では、小学校教員の体育実技指導力の低下や中学校における運動部活動指導力の低下と指導者不足の問題が顕在化しています。また、スポーツ中の事故への適切な対処や子どもの発達段階に応じて指導する必要性が叫ばれ、実技指導のみならず安全面や運営面まで計画的に運動部活動をマネジメントすることが要求されています。地域スポーツクラブの運営や指導に関わり、主体的に子どもや保護者と接することで教員になったときに役立つ生きた知識を持ち、体育・スポーツ活動や正課教育以外の幅広い児童・生徒との教育的活動において活躍できる人材を育成できると考えています。また、退職及び現職教員が地域スポーツクラブの活動をフィールドにして学生の指導力養成に関わり、理論では教育できないノウハウを生きた知恵として学生に教育されることを期待しています。

今年度から京都府および京都市を退職した教員を客員教授として迎え、運動部指導者育成プログラムをスタートさせています。まずは、入門授業として「スポーツクラブ指導入門」を開講しました。初年度は20名の受講生があり、スポーツ科学や指導方法の基礎を学び、KYO^{2}クラブのスポーツ教室で見学と指導実習を行ないました。ここでは、今後の運動部活動指導者への意識付けとKYO^{2}クラブの活動を理解することが主な目的ですが、4年間かけて体育領域専攻以外の学生にも運動部活動指導者として必要な知識と実践的指導力を、日本体育協会の指導者資格講習会と本学の授業およびインターンシップなどを通して段階的に身につけさせます。在学中に一定のカリキュラムを修了した学生には仮資格を発行し、近隣の学校や他の地域スポーツクラブに外部指導者として派遣することやKYO^{2}クラブのスタッフとしてさらなる指導・運営経験を積ませ、卒業時に指導者資格を発行します。本学の運動部活動指導者資格の特徴は、ある年代やあるスポーツ種目に特化した指導技量を保障するものではなく、どの年代、どのスポーツ種目においても共通して必要となる指導力、運営力などを身につけることにあります。実際に、学校教員になって自分の得意なスポーツ種目以外の運動部を担当することも少なくないでしょう。そのような場合でも、自信をもって指導を行なうために役立つものと考えています。将来は、本学が全国のモデルになり、全国の教育学部で同様のシステムが採用され、運動部指導者の力量の向上と学校運動部のさらなる発展に寄与することを目指しています。

学校運動部活動指導者資格認定システムの概念図



4. おわりに

運動部活動はスポーツ活動の場としてのみではなく、人間関係や社会規範などを学ぶ場としても教育的価値は広く認められています。さらに、現在の少子化や子どもの体力低下、地域コミュニティの崩壊といった社会問題に対してますますその価値が高まるでしょう。一方、教員となってから運動部活動の指導に積極的でないものや自信をもてないものが多くなっています。我が国の優れたスポーツ文化の1つである学校運動部活動を今後も維持・発展させていくためには、教員養成の段階から指導者の質を高めるための積極的な取り組みが必要でしょう。

運動部活動の指導者育成について、その意義や重要性を理解される方はとても多くいます。しかし、学校運動部活動はすでに長年にわたり各学校の特色として取り組まれたり、教員の個人の努力によるところが大きかったりするものです。そのため、運動部活動の指導者資格を大学で発行することに違和感を感じる方も少なくありません。しかし、資格は、あくまでも資格であり、持っていると何か得があるとか持っていなければ損をするというものではなく、取る過程で力量を形成し、本人が努力した証となるものです。資格発行にとどまらず、運動部活動指導に問題や不安を抱えている教員やさらなる指導力の向上を目指す教員にも、本学としてサポートできる体制を整えていきたいと考えています。

またKYO²クラブは、学生の指導力養成のためだけではなく、地域のスポーツ活動の拠点として、近隣学校と連携したスポーツを通した教育の拠点となり得る可能性を秘めています。子どもの体力・運動能力はもちろんのこと、社会性や規範意識をスポーツを通して身につけること、学生のスポーツの実践的指導力を養成すること、そこに退職および現職教員や保護者がかかわることは本来分けられるものではなく、ともに歩むべきものでしょう。何かを身につけるために、何かをするという単純な目的と手段の関係ではなく、皆が必要とする場には社会や教育における本来の姿があるような気がします。損得ではなく、費用対効果ではなく、その場を皆がそれぞれの立場で楽しみ、かつ有意義なものにすることが究極的な目標でしょう。このような場を皆さんとともに大切に築いていきたいと考えています。今後も学校教員、地域のスポーツ指導者、地域の方々のご協力をいただけますようお願いいたします。

「上海師範大学短期研修」同行記

社会科学科教授　田 岡 文 夫

6月に入って間もない頃であったか、国文科谷口匡教授と学内で立ち話した際に、8月初旬に今年度の上海師範大学での短期研修を実施するが、引率同行しないかとのおさそいを受けた。8日間の全日程でなくても半分でもよいとのことであり、日程前半8月6日（金）～9日（月）の4日間だけではあるが同行することにした。後半は谷口先生が当たられる。研修前半の日程には、話題の上海万博見学も含まれていて魅力を感じた。前半だけでは谷口先生にかえってご迷惑かとも思ったが、11日（水）に教員免許状更新講習講師が当たっていてやむをえなかった。以下この短期研修のこと、上海師範大学や上海万博、あるいは発展変貌する上海の街のことなど、4日間の同行で感じ考えたことを紹介したい。

上海師範大学との提携開始以来、長く続いてきた同大学での夏期の中国語研修は、近年学生の参加希望が少なく、昨年、一昨年と見送りになっていたという。それが今年、日程を一週間程度に短縮、中国語研修から異文化理解、国際交流へと主旨を若干変更することで10名の参加希望があり、3年ぶりの実施になったようである。参加の研修生には科目名「異文化理解研修（中国）」として自由科目1単位が認定される。研修には本学での事前研修と事後研修がそれぞれ一回ずつ行なわれ、谷口先生が担当される。事前研修に部分的に参加したが、先に課題文献（竹内実（2009）『中国という世界』岩波新書等）が提示され、参加者はそれをすべて読んだうえで参加していたようである。

8月6日（金）8時半に関西国際空港日航チェック・イン・カウンター前に集合。10名の研修生は大学院修士課程1回生 1名、学部2回生2名、同1回生7名（男性3名、女性7名）である。10時25分発のJL891便に搭乗、現地時間11時55分（日本時間12時55分、日本との時差1時間）、定刻に上海・浦東国際空港着。入国手続きを済ませ、空港出口を出たところで、上海師範大学、外国語学院日本語科Eさんと商学院のSさん2名の女子学生の出迎えを受ける。中国元購入や迎えのマイクロバスにたどり着くのに若干手間取り、2時前に上海師範大学外賓楼に到着、チェック・イン。外賓楼とはキャンパス内に同大学が所有する訪問者用のホテルで、本学からの訪問者もほとんどここに泊まるようである。諸連絡、打合わせ等のあと夕刻から、研修生諸君は待ち兼ねたように市内観光、豫園見学に10名揃って出かけていった。夕刻、時折夕立。以後いよいよ上海師範大学での研修が始まる。

翌7日（土）の予定は終日上海万博見学。朝8時に外賓楼玄関ロビーに集合。留学生センター女性職員のRさんの案内でマイクロバスで万博会場へ、入場料は160元。入場券はRさんがまとめて買って下さったが、これを買うのがひと苦労、30分以上かかる。入場列に並んで入場にまた30分ほど要し、入場後は分かれてそれぞれが自由見学。帰りは晩8時半に入場ゲート近辺に集合、ただし別行動で各自外賓楼帰館も可。

入場列に並んでいるうちに私は研修生諸君とはぐれてしまい、そのあと1人で上海万博を見物することになる。たしかにかなりの人出ではあったが、当初の予想ほどではなかった。ここでは万博と呼ばずに世博と呼んでいる。圧倒的人気は中国国家館と日本館、ついでアメリカ館といったところか。中国国家館は事前の申し込みによる整理券なしには入られない。同じ建物（よく知られた赤いユニークなパビリオン）内にある中国省区市連合館には入られた。これは中国内の各省、各市毎の展示館。そのほかテーマ館にも苦労なく入られた。ここは万博テーマBetter City Better Lifeに関する展示。列に並んで2～3時間などというパビリオンには入らずに会場を見てまわり、全体の感触をつかむことにした。主催国中国の取組は当然としても、それ以外では日本の入れ揚げようが目立ち、入場者の多寡はそれを反映しているようである。1970年大阪万博のときすでにそうであったが、人々が博覧会の展示で科学技術その他に関して具体的で進んだ知識や情報を得るという時代ではもはやなくなっている。明治の半、東京・上野の内国勧業博覧会で啓発されて自動織機を開発した豊田佐吉の話は遠い昔のこと。今は国際交流、国威発揚、娯楽のイベントといったところで

あろうか。偶然のことかもしれないが、黒人も含めて非アジア人というか欧米人の姿が異様に少なかった。上海市街においても同様の印象である。

会場は黄浦江をはさんで二つに分かれており、主要会場の左岸（南岸）から右岸へ無料フェリーで待ち時間10分ほどで渡れる。右岸では（左岸にあった日本館とは別の）日本産業館が人気パビリオン、しかし多勢の待ち行列を見て入場をあきらめる。会場へは地下鉄専用線が乗り入れている。5時頃会場をあとにし、地下鉄、バスを乗り継いで外賓楼に帰館。マイクロバスは9時半頃外賓楼に帰ってきたが、本学研修生は乗っていない。研修生一行は10時頃ほぼ全員揃って帰館したが、夕刻まで万博会場にいて、あと市内、新天地の観光に向ったとのことである。

8日（日）は終日自由行動となっており、大学所定の行事はない。研修生のうち1名は早朝より蘇州見学に出かけるが、残る9名は揃って午前中から市内見学に出かける。昨日、一昨日と彼らは夕刻からの市内観光は行ってきたが、いずれも時間が限られており、この日は1日かけて心ゆくまで、観光と買い物をしたいようであった。彼らを送り出したあと、私は昼過ぎに近くのスーパーへ買い物に小一時間外出したほかは3時過ぎまで館内で自分の仕事をする。3時過ぎからバス、地下鉄を乗り継ぎ、福州路の書店街に出かけ、外文書店、新華書店を覗く。中国語は読めないが、どんな本がどれぐらい出版され書店に並んでいるかは、興味深い。好天、猛暑続きの上海、この日も暑かったがカラリと晴れた夕空にさそわれ、上海市街北東方向の虹口、魯迅公園辺りまで足を伸ばし、長年訪れたいと思っていた街並みや建物を見に行く。近現代史に関心のある私にとり、上海には見るべき街並み、建物にこと欠かない。福州路に戻ってレストランで1人夕食を済ませたあと外賓楼帰館。研修生諸君は私よりかなり遅く帰館。終日上海市内を見物し、最後は現在世界一、二の高さをほこる浦東の上海世界金融センタービルの最上階展望室（料金150元、かなり高い）に上ってきたという。

9日（月）よりいよいよ中国語研修など大学での研修が始まる。8時20分に留学生センターのRさんが外賓楼玄関ロビーに迎えに来られ、彼女の案内で留学生センターへ。2階の小教室で語学研修。研修開始前に、研修生諸君に今日谷口先生と交代で私が帰国する旨挨拶、研修日程後半の激励もしておく。9日（月）から12日（木）まで午前中中国語研修、午後中国文化体験、日中学生交流、夜上海雑技、京劇等の公演鑑賞などの研修予定が続く。

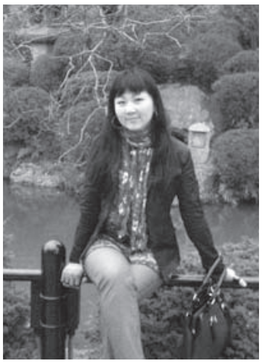
12時半に外賓楼玄関ロビーで、同大学国際交流処副処長のK教授、外国語学院K先生、留学生センターRさんと会い、キャンパス内の中華料理店の一つへ案内される。キャンパス内に大学経営の立派なレストラン（中華料理）が多数ある。今日私と交代のため来ら

れる谷口先生の歓迎会、今日帰国する私の送別会をして下さる。飛行機の都合で1時頃に谷口先生が、出迎えの外国語学院日本語科の女子学生Hさんとともに到着、昼食、歓談。それぞれの大学からのお土産を交換。この歓迎・送別会のあと小一時間、外賓楼玄関ロビーで谷口先生に引継をしたあと、3時に外賓楼を出発、谷口先生を出迎えに行かれた同じHさんにタクシーで送られ浦東国際空港へ。空港から研修生諸君が登った浦東の上海世界金融センタービルが見える。猛暑しかし好天に恵まれた4日間であった。6時10分発JL891便で帰国の途に着く。

研修生諸君は海外旅行経験がない人がほとんどのようであった。はじめての外国の地で地下鉄、バスなど公共交通機関の利用方法を会得するのも容易でないと思う。そうした彼らが地図をたよりに案内なしで上海の行きたいところへ行き、見たいものを見てくることができることにいささか感心した。私は小中高生、あるいは大学生が見知らぬ外国の大都市で案内なしで観光、買い物等をすることで学ぶことは多いと考えている。しかも児童、生徒の海外研修機会はずいぶん増えつつあり、教員の引率機会も増えている。教員をめざす本学学生にこうした研修機会を提供する意義は大きいと思う。今度の上海師範大学短期研修も存続にとどまらず、一層内容豊かなものに育てて行く必要性を強く感じる4日間であった。その後谷口先生と研修生は、13日（金）、全員無事帰国されたようであるが、秋、講義が始まった頃、研修生諸君のこの行事に関する印象、この行事から何を得たかたずねてみたい。谷口先生のご帰国後の話では、私の帰ったあとの上海はさらに暑く、連日39℃、40℃に達したとのことである。谷口先生にはご迷惑をおかけしたが、この行事への参加のおさそいを頂いたことに感謝している。そのほかお世話になった関係各位に厚く御礼申し上げたい。

楽しい振り返り

日本語・日本文化研修留学生　BOPOSHOVA Aizada
ボポーシェワ　アイザーダ　（キルギス出身）



早いものですが、自分も気づかないうちに日本での一年間が経ってしまい、今帰国の準備などが始まったところです。なんとなくちょっと寂しい感じがします。慣れてきた環境や、とても気に入れた国を出発するのは寂しいからですね。

日本は本当に素晴らしい国だなと今振り返って思います。ちょうど去年の8月の下旬のことを思い出しました。その時日本での留学がやっと決まり、ばたばたしているところでした。

私はキルギスでは東洋国際関係学部で日本語を学びながら、異文化コミュニケーションを専門にしています。

大学に入って、日本語の勉強を始めた時、なによりも日本へ留学したいという気持ちが強くて、大学4年生になってからやっと私の夢がかないました。日本へ留学できれば絶対京都と憧れて、日本文化の中心の町、そして1000年以上日本の首都であった町に住んでみたかったので、京都教育大学を選びました。

京都教育大学では留学生向けの授業が少ないので、来たばかりの時は日本人の学生と一緒に授業をとるのは大変でした。授業の内容、そして日本語があまりわからなくて、これまで何を勉強してきたのかと思ったことがあります。でも2学期目に入ると授業などの楽しさを感じるようになってきました。なので京都教育大学を選んでよかったなと思います。

京都教育大学の学生は、感覚ですけれでも、勉強に夢中な気がしました。学生は地味ですが、勉強でよく頑張っていると思いました。そして京都教育大学の学生から私も影響を受けて、この一年間で勉強を頑張ったり、これからの大学院進学のことも考え始めました。

大学ではサークルなどには参加しなかったのですが、大学の方からインターンシップに参加し、外国人の友達と一緒に伏見青少年活動センターというところで日本人と一緒にボランティア活動を8か月ぐらいやっていました。この活動を通して異文化理解を深めたり、交流したり、ゼロからイベントの企画を考えて、それを実現するのはとても楽しかったです。自分も担当者になってイベントを企画するのは勉強になったと思うし、日本人の友達もできました。

そしてできるだけ京都観光をし、関西地方ではいろいろ旅行をしました。京都では清水寺はなんて美しいところだろうと思いました。そして5回ぐらい行きました。実は大学二年生の時、日本へ留学した先輩から清水寺のチケットをもらって、チケット裏面に私も京都へ留学するときそのチケットを持って清水寺へ行くと書きました。持っていけるという夢がかなった時、自分のことを一番幸せだなと思いました。

和食はとても美味しくて、日本料理の中ではおすしが大好きです。キルギスは海に囲まれていないので残念ながらおすしを売っていません。おすしがないと帰ったらどうしょう･･･

歌が苦手な私は来日してからカラオケが好きになり、友達とカラオケへ行ったり、日本の歌を歌ってみました。コブクロときろろには目がないです。

日本では本当に国際化が進んでいて、めったにキルギスでは会えないろんな国の方に出会って、いろいろな話ができたのはいい経験だったと思います。そして留学は絶対に有意義な経験になると思いました。

東アジアの語り物音楽
――義太夫節・パンソリ・評弾の音楽的特徴に関する比較研究――

音楽科教授　垣 内 幸 夫

1．はじめに

私がこれまで行ってきた研究は、日本の伝統音楽の一つである義太夫節（人形浄瑠璃「文楽」のための三味線音楽）に関する音楽学的研究である。東京芸術大学の大学院生だった時、岸辺成雄（東京大学名誉教授）先生の「東洋音楽史」を受講したのがきっかけで、岸辺先生から紹介されて文楽三味線の四世鶴澤重造師に師事することとなった。以来37年間、義太夫節の研究を続けている。これまで行った義太夫節研究で得た知見をベースに現在進めているのが、東アジアの語り物音楽である韓国のパンソリ・中国蘇州の評弾（ピンタン）と日本の義太夫節の芸の伝承及び音楽的特徴（主に声の技法）に関する比較研究である。

2．義太夫節の音楽学的研究

義太夫節研究における私のテーマは、歴史的音源に残された義太夫節の演奏を分析することによって、近代における義太夫節の伝承について明らかにすることである。最初に行ったのは「尼ケ崎の段」（『絵本太功記』十段目）の冒頭のヲクリに関する比較分析研究。続いて井野辺潔・横道萬里雄先生とともに行った「義太夫節の様式展開」に関する音楽学の共同研究。そして近代の文楽における彦六系と文楽系の演奏・演出様式に関する研究がライフワークとなって今日に至っている。

次に平成18年10月の（社）東洋音楽学会第五十七回大会（於：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター）で発表した「近代における義太夫節の伝承－歴史的音源資料による『菅原伝授手習鑑』四段目「寺子屋の段」の比較分析研究－」の成果について紹介する。

第一点目は「寺子屋の段」の四段目のスエテに関する指摘である（スエテとは義太夫節の代表的な旋律型の一つ）。明治期以降、太夫の語りを中心とした古風な義太夫節を伝える「文楽系」と、三味線を中心とした派手な手数（旋律型）やノリ間が特徴的な近代的演奏・演出様式の「彦六系」が互いに芸を競い合っていた。現行文楽の舞台にもこの二つの演奏・演出様式が継承されている。本発表で明らかにしたのは、文楽系・彦六系のどちらが「寺子屋の段」の四段目のスエテで「ギン」（三味線の二の絃の開放絃の長二度上の音）を通って一の絃に落ちるか、どちらがギンを通らないで一の絃に落ちるかという問題である。「寺子屋の段」の歴史的音源資料の分析結果と文献資料の記述を突き合わせたところ、本来古風を伝える文楽系の方がギンの音を通らないで一の絃に落ちることが分かった。それは明治5年～10年の間文楽座の紋下（最高位）であった五世竹本春太夫の声の特性に起因するものであった。石割松太郎が「団平節付の苦心と『彦六』の由来」（『人形芝居雑話』所収）で指摘した春太夫の声の特性に関する記述と歴史的音源資料の分析結果によって、春太夫以前の「寺子屋の段」ではギンの音を通って一の絃に落ちるのが「寺子屋の段」本来の四段目のスエテであり、明治期に確立した彦六系の方に古来の四段目のスエテが正しく伝承されていることが明らかとなった。

第二点目は歴史的音源資料によって証明した松葉屋の型の存在である。八世竹本綱大夫は『芸談　かたつむり』の中で「寺子屋の段」について「『祖父が抱へて走りゆく』は文楽系と彦六系があって、このほかに松葉家（五世広助）の型もあります。」と述べている。歴史的音源資料を悉皆調査した結果、米国人フレデリック・ウィリアム・ガイズバーグ（1873～1951）が明治36年に来日して行った出張録音の中に、娘義太夫の竹本京子・竹本京枝による「寺子屋の段」の素浄瑠璃が3分5秒録音されており、その演奏の中に私がかつて聴いたことのない旋律型が存在することを知った。その音源を文楽の太夫・三味線の方々に聴いてもらったが、「こんな節は聴いたことがない。」との答えしか返ってこなかった。その後、九世竹本染太夫・四世豊澤廣作の録音と、七世豊澤廣助の弾語りの録音の中にも同様の旋律型を確認することができた。しかしこの旋律型が松葉屋の型であるという確証は得られない。数年の歳月が過ぎたある日、偶然「淡路人形座」の演奏する「寺子屋の段」の映像を見ていて、彼らが現在この旋律型を演奏していることを知って驚いた。そこで平成17年8月に南あわじ市に赴き、淡路の人形浄瑠璃を指導しておられる人間国宝の鶴澤友路師を訪ねてこの旋律型についてお伺いした。ご高齢の友路師は「友次郎師匠からこの珍しい手（旋律型）を教えて頂きました。」「七世廣助師からもこの手を教わりました。」とお話ししてくださった。この旋

律型を松葉家の型と断定したのは、録音を残した四世豊澤廣作とこの旋律型を友路師に教えた六世鶴澤友次郎（猿糸時代）が、共に五世豊澤廣助（松葉家）の直弟子であり、さらに七世豊澤廣助が五世豊澤廣助の養子であったことに因る。

3. パンソリの研究

私が初めてパンソリの実演を聴いたのは平成20年3月22日のことである。それはソウル特別市瑞草区にある国立国楽院の牛眠堂で催された金美那のパンソリ公演であった。この時、会場にいた聴衆が演奏中に頻繁に声を掛けていた。声を掛ける人々が老若男女を問わないことにも驚かされた。と同時に演者と聴衆の間の一体感に、言葉に言い尽くせない深い感動を覚えた。この体験がパンソリ研究を始めるきっかけとなった。パンソリが「オーイ」「オルシグ」「オルス」「クロッチー」「チョッター」などのチュイムセ（掛け声）によって、聴衆と舞台が一体化する芸能であることを知ったのは後のことである。

同年9月にパンソリの故郷である全羅道に行き、初めて南原市の廣寒楼や春香テーマパークを訪れ、東便制の創始者である宋興禄（1800～1863）の生家を訪ねた。韓国語が全く分からない状態での不安な一人旅であったが、パンソリへの熱い思いが私を駆り立てたのである。全羅道を離れる日に全羅北道立国楽院に立ち寄り、どうしてもパンソリを教えているところを見学したいと申し出たところ、金美貞（1966～）教授のご好意によりパンソリクラスを見学することができた。別れ際に金美貞教授が『東超制パンソリ人名録』（2007年）という大きな本をくださった。その後、韓国に行くたびにソウル市内にある教保文庫と国立国楽院にある売店に立ち寄って、パンソリに関する文献とCD・DVDを収集し続けた。

パンソリは一人の歌い手（ソリックン）と鼓手（コス）の叩く太鼓（ソリプク）によって、物語性のある語りと歌を演奏する韓国の代表的な語り物音楽である。パンソリのパンは人々が集まる場所を意味し、ソリは音を意味する。文楽の太夫によると、韓国で義太夫節を演奏すると、韓国の人は皆義太夫節のことをパンソリだというそうだ。互いの伝統文化の根幹にある表現様式が同じであるということを聴衆が直感的に理解するのであろう。私もパンソリを初めて聴いた時、これは韓国の義太夫節だと思った。

科学研究費の補助を受け、パンソリ調査のため2009年8月18日～20日の3日間、金美貞教授のパンソリクラスに参加し、受講生とともにパンソリの基本である長短（チャンダン）を学んだ。クラス授業の他に金教授は個人指導の形でジンヤンジョ・チュンモリ・チュンジュンモリ・ジャジンモリ・オッモリ・オッチュンモリ・フィモリの7種類の長短について演奏を交えながら丁寧に指導してくださった。パンソリ研究はこの長短の理解なくしては成り立たない。帰国後に名唱（ミョンチャン）の演奏をCDで聴いたところ、長短が少しわかるようになったお陰で、パンソリが以前より理解できるようになった。

パンソリの伝承に関して大変興味深い問題がある。それは「制（ジェ）」と「パディ」の存在である。義太夫節の伝承において最も重要なものに「風（ふう）」がある。西風・東風〈座の風〉、二段目・三段目・四段目の風〈段の風〉、切場・端場〈場の風〉、政太夫風・春太夫風・染太夫風〈太夫の風〉を正しく表現することが義太夫節演奏の規範となっている。パンソリは全羅道の東側で発展した東便制と、西側で発展した西便制に大別することができる。これが義太夫節の〈座の風〉にあたる「制」である。パンソリにおける名唱個人の特徴である「パディ」は、義太夫節の〈太夫の風〉に該当する。今後の研究によって義太夫節の「風」とパンソリの「制」「パディ」の関係について明らかにしていきたい。

4. 蘇州の評弾について

評弾は評話（ピンホア）と弾詞（タンツー）という二つの芸能を合わせた呼称である。日本の能と狂言を総称して能楽と呼ぶのと似ている。評話は語りを主としており日本の講談のイメージに近い。蘇州の方言で語られる弾詞は三絃（サンシェン）と琵琶（ピーパー）を演奏する二人の奏者の掛け合いによる語り物音楽である。義太夫節やパンソリとは趣が違うが、歴史的にほぼ同時期に発展した東アジアの語り物音楽の一つとして大変興味深い芸能である。現在、上海と蘇州の評弾学校で後継者が育成されている。平成22年1月28日～2月2日の6日間中国の蘇州に行き評弾の調査を行った。蘇州評弾学校を訪れ、学生が評弾を学ぶ姿を見学し演奏を聴かせてもらい、同校の特別教授で評弾奏者の陶謀炯氏への聞書を行った。陶謀炯氏の聞書によって、評弾の伝承には演目毎に継承者の系譜が存在すること、卓越した個人の芸風を伝える調という概念があることを知った。数多くの歴史的音源が残っている蔣月泉の蔣調・徐云志の徐調・夏荷生の夏調等多くの調が今日伝承されている。各調の曲の弾き出しの旋律型を分析した結果、その違いによって調が区別できるようになった。今後、評弾と義太夫節の声の技法を比較することで、互いの音楽的特徴をより明確にしていきたいと思う。

（本稿は平成21～23年度科学研究費基盤Cの補助を受けて行った研究成果の一部である。）

ホケカン10年一昔

保健管理センター所長　中 村 道 彦

この度、副学長の武蔵野實先生から本稿執筆の依頼をいただき、私が京都教育大学で過ごしました歳月を振り返る機会を与えられましたことに感謝しています。2001（平成13）年4月、本学に着任してから来年2011年3月で在任期間が10年になります。10年一昔といわれますので、この歳月を振り返ることは、私の狭い視点からであっても、この紙面のタイトル「今昔物語」にかろうじて適うものと考えています。しかしこの10年は一昔どころではなく、二昔も三昔ともいえるほど大きく移り変わった人生のエポックでした。

私はこの年、現副学長の岡本正志先生と共に就任しました。当時の村田隆紀学長から辞令をいただいた日のことを今も鮮明に覚えています。保健管理センター（ホケカンと愛唱されています。）の仕事は私には初めての経験でしたので、とりあえず日常的な業務はセンター看護師の方と相談しながらこれまで通りに行うことにしました。そして大学のためになることは何かと模索する中で、これまで私が医療や保健の領域で培ってきた力を教育の現場にも役立てたいと考えるようになりました。この当時、学校ではいじめや不登校が大きな問題になっていましたので、予防の考えを先の校内問題に適用して教育現場に役立つ体制を提言できないかと考えました。そこで「子どもたちの安全と安心を守るために～校内危機防止プロジェクト」を立案し、学長裁量経費をいただきました。

校内危機防止プロジェクトは、一次（校内問題を発生させない）、二次（早期発見早期対応をする）、三次（校内問題の再発や派生問題を防ぐ）の防止活動で構成され、一次防止活動として怒りの対処（アンガーマネジメント）を学習する心理教育Psychoeducation（PE）プログラム「怒りとうまくつき合うための学習」を開発しました。さらに二次防止として積極的教室対応Assertive Classroom Treatment（ACT）、三次防止としてスクールサポーター体制School Supporter System（SSS）を提案しました。PEとACTは本学附属校のみならず、大阪府（茨木市や枚方市）、京都市、滋賀県などで児童生徒や教員を対象に実施してきました。その後、教育臨床心理実践センター相談補佐員の方が「友達とうまくつき合うための学習」「いざこざをうまくやりすごすための学習（仮題）」を、私は「あなたも守れる命のともしび」という自殺防止プログラムを開発しています。

このような拙い出発でしたが、当時のセンター所長、杉本弘子先生に支えていただきながら第一歩を踏み出すことができました。こうして私は国立大学における「穏やかな日々」を過ごしておりました。2003年に杉本先生の後任としてセンター所長を拝命し、「心の健康相談」を充実させるべく、センター 2階の休養室を改装して相談室にしました。相談室開設後まもなく、本学美術領域の卒業生から素晴らしい作品をいただき、魅力的な相談室になっています。心の健康相談を利用する学生数は年々増加し、最多の年には相談件数が700件台に及びました。学生の皆さんが心の健康相談の存在を認知するようになったことが大きな要因ですが、現代の若者の多くが心の支えを必要としていることももう一つの重要な要因です。殊に自己評価が低く対人場面で緊張しやすい若者が増え、人の不評を買いたくないために「好青年」を装ったり、苦手な対人場面をひたすら避けようとしたり、体調不良を訴えて心の問題から目をそらしていたり、人を見下すことで自分を守ろうとしたりします。心の健康相談の充実を図るため、学生課のご配慮で学外心理カウンセラーの辰巳朋子先生にお力添えをいただいています。さらに学内から臨床心理士の内田利広先生、花田里欧子先生、小松貴弘先生にも心の健康相談のお手伝いをお願いしています。2009年度から教育臨床心理実践センターの本間友巳先生や教育学科の西村佐彩子先生を含む、学内外の臨床心理士の方々のお力添えを得て、健診後に新入学生全員の一斉（スクリーニング）面接を実施し、心の問題や発達問題について継続的な面接につないでいます。

また、大学院で学んでおられた附属高校の明石智子先生のご提案があり、附属高校の先生方を対象にした相談会を毎月1回開催することになりました。相談会では各学年団の先生方が担任しておられる生徒の問題についてコンサルトし、希望のある場合には生徒や保護者の方が私と相談できるようにしています。高大連携によって年々、来談する生徒や保護者の方は増加しています。また、1学期には子どもの心性について理解を深めるていただけるよう保護者会で講演もさせていただいています。

一方、身体面の健康管理のため、センター校医とし

て内科医の落合公朗先生と田原和夫先生に毎週交代でおいでいただき、長年にわたり学生の内科診察をお願いしてきました。また学内では体育学科の井上文夫先生と障害児教育の小谷裕実先生、小谷先生のご退職後は発達障害学科の郷間英世先生に保健医としてご尽力をいただいています。このように学内外の方々のお力添えをいただくことでセンターを大いに充実させることができましたことを、この場をお借りして皆様に厚く御礼申し上げたいと思います。

2004年に国立大学法人となり、新たな大学の在り方を模索する時代を迎えました。殊に企業などと直接的な関連の少ない教育大学では、独自の収入源を求めることはきわめて困難であることや、その一方で教育大学の使命の重要性を考えると、どこまで民営化が望ましいのか疑問に思うこともあります。確か松下幸之助の言葉だったと思いますが、教育や研究では「金は肥料」という言葉を思い出します。無駄な肥料のばらまきは避けるべきでも、最少の肥料から最多の収穫を求める経済効率重視だけではなく、その品質を保証するために非効率的であっても土壌改良の重要性も見直されるべきでしょう。

法人化に伴い、保健管理センターの新たな役割として産業医活動が加わりました。それまで保健管理センターでは学生の健康管理が主な業務でしたが、法人化以降は教職員の健康管理にも関わることになりました。このため健康管理医が産業医を兼ねることになりました。そして職場巡視や安全衛生委員会への参加・提言などもセンターの重要な業務になりました。特に小崎正行氏を始めとする総務課の御協力を得て学生や教職員の健康管理の一環として禁煙活動の推進を目指しました。

喫煙は合法的な行為であり、禁煙は喫煙者個人の健康問題と考えられてきました。しかし時代と共に、たばこに対する認識が、嗜好品や社交手段から依存物質（ニコチン依存症）や自殺手段（慢性自殺）へと変化し、さらに喫煙者を取り巻く家族や友人への影響（受動喫煙）も無視できないことが認識されてきました。このことから本学の禁煙活動を推進するため、産業医として安全衛生委員会に「構内完全禁煙デー」を提案しました。それは禁煙デーを契機に禁煙を始めてほしいとの思いからです。当初は毎月末日を禁煙デーとしましたが、それでも教授会で相当な反発があったと前事務局長の菊川治氏から聞きました。やがて禁煙デーは月2日となり、2010年6月からは学生の要望を受けて毎週水曜日が禁煙デーになりました。今後は敷地内の完全禁煙が実現されることを願っています。

2008年（平成20）年には、全国大学保健管理協会近畿地方部会研究集会を主催することになり、当時の学生課長の藪内富美男氏のご尽力を得て、平成20年7月15日にメルパルク京都5階会議室で、120名を超える参加者を迎えて開催しました。この研究集会ではランチョンセミナーや本学交響楽団メンバーによる四重奏演奏など、新たな企画を実施し、好評を博すことができました。特別講演には前学長の寺田光世先生に『解体新書』についてお話いただきました。さらに当時図書館長をされていました現学長の位藤紀美子先生の許可をいただき、原本を会場に展示することもできました。

この他、留学希望学生の適正面接、駅伝参加学生の特別健診、長時間労働に伴う相談指導、電離放射線取扱者に対する特別健診、職場復帰指導、感染症（麻疹や新型インフルエンザなど）防止活動、など種々の活動を行ってきました。殊に新型インフルエンザの学内感染防止では当時学生課の前田一之氏が重要な役割を果たされたことに敬意を表します。法人化以降、センター機能が多様化することを踏まえ、新たなセンター構想の一つとして大学人の安全と健康を包括する総合センターを提言しました。しかしこの構想は大学全体の組織改革にも関わるため、この10年内に実現できるものではなく、長期的な構想として次世代を担う人々に託したいと思います。

2009年から国立大学法人保健管理施設協議会（会長は千葉大学の長尾啓一先生）の副会長（理事）として、またメンタルヘルス常置委員会の自殺問題検討ワーキンググループ代表として、大学における自殺対策ガイドラインを策定しています。今年度中に全国の大学に向けてガイドラインを提言できればと思っています。

10年という節目は、次の節目に向けた出発点でもあります。私の歩んできた10年間は、一人の道ではなかったことを実感します。多くの人々に支えられてここまで歩んでこれたことに感謝しています。この10年が保管管理センターの発展につながり、さらに京都教育大学にとっても有意義なものであれば無上の喜びです。今後共に京都教育大学が優れた教育者を世に送り出し、志の高い若者達を育成し、日本が誇り高く豊かな国家として世界に貢献できることを願っています。

就職・キャリア支援センター／学生課の紹介

学生課長　石　坪　辰　男

平成22年6月24日に「学生課」は、平成22年4月末日に完成した本部庁舎の北側に増築された建物に移転しました。また、同年8月末日には、増築された同建物内に1号館C棟2階の「就職・キャリア支援センター」が移転しました。

旧学生課が入っていた建物には、引き続き「教務課」と「入試課」が配置されています。

本増築建物は、構想として現在1階完成部分に3層を増築（附属図書館の用途）し、全体で4階の建物になる予定です。

写真1　道路側から増築建物正面

道路側から階段を上がると表玄関、風除室を抜けると、広いロビーに入り、真正面に附属図書館の中庭が眺望出来ます。将来計画でこのロビーから附属図書館に入館できることになる予定です。

写真2　1階ロビー

ロビーを右に入っていくと、「就職・キャリア支援センター」のゾーンになります。

就職・キャリア支援センターには、閲覧用就職関係図書・資料、企業等からの求人票、就職情報検索用パソコン等を整備しています。

また、相談ブースを設け、3名の経験豊かな小学校、中学校、高等学校の元校長先生を本学客員教授として迎え、教員就職について相談や指導助言を行っています。

写真3　就職・キャリア支援センター（1）

写真4　就職・キャリア支援センター（2）

教員採用試験関係の閲覧図書として以下の資料等を揃えています。その隣は、模擬面接を行うスペースの他、応接室を兼ねています。

閲覧図書

〇全国都道府県の教員採用試験実施要項
〇教員採用模擬試験の問題・解答等
〇教員採用試験受験用参考書及び全国の試験問題集
〇教員採用試験対策セミナー配付資料
〇小・中・高・特別支援学校で使用している教科書
〇教育関係の新聞や雑誌
〇私立学校教員募集要項
〇臨時的任用講師募集要項

本学の就職・キャリア支援には3つの特徴があります。（平成22年度京都教育大学就職・キャリア支援のリーフレットから転載）

⑴　入学から卒業・終了後まで支援する多様で体系的なプログラム

本学では入学から卒業・終了後まで、進路に応じた就職・キャリアのサポートプログラムを用意しています。まず、キャリア教育プログラムとして学部3回生後期の授業科目「教職キャリア実践論」です。討論やロールプレイ等をとおして専門教育（教職・教科教育科目）や実地教育で身につけた知識と技能を有機的に結びつけ、教職への意欲や教育について客観的に考える力高めることをねらいとしています。公立学校で教員・校長経験のある教員がチームで指導しています。

教員就職については、「総合セミナー」「課題別セミナー」「直前セミナー」「実技セミナー」と、学校種・都道府県市の希望に応じた就職指導を大学全体の支援体制のもとで行っています。また、卒業・終了後、自信をもって教壇にたつための「フォローアップセミナー」も開催しています。

企業就職については、就職支援事業を行う民間企業のノウハウを活用した支援プログラムを用意しています。また、公務員試験についても本学で学んだ専門性を活かすことができる各種採用試験の説明会を学内で開催します。なお、卒業・終了後も就職支援セミナーや就職相談などの支援を受けることができます。

⑵　個に応じた就職活動のための「就職·キャリア支援センター」のサポートプログラム

人生の分岐点となる就職は、最終的に自分の意思と努力により実現するものですが、そのためには自分を知り、相手を知ることが大切です。まず自分に適した職業に就くためには、自分の興味や適正が正確に把握できていなければなりません。また、就きたい職業に関する新しい情報を常に入手する必要があります。

このような個に応じた就職支援の核となる場所が「就職·キャリア支援センター」です。自己分析や就職に関する様々な資料や書籍を通じて最新情報を入手できるとともに、自学自習の場としても利用できます。必要に応じて3名の客員教授の先生が相談に応じ、論作文や面接の個人指導も行います。入学から卒業・終了後まで誰もが気軽に利用できます。

⑶　現場主義で実践力を身に付けるインターンシッププログラム

本学の教育課程は、授業で学ぶ理論と現場での実践を往還・融合することによりキャリア形成に資するという特徴をもっています。すなわち専門教育・実地教育・キャリア教育が一体となって、教育専門職としての力を育成するのです。年次ごとに多様な実地教育プログラムがありますが、中でも就職に直結するのが「インターンシッププログラム」です。

教員就職については、3回生後期の選択科目として「教育課題研究実地演習」「学校インターンシップ研修」があります。この科目では学校現場で授業はもちろんのこと、朝から夕方まで教員の仕事がどのようなものか実際に経験でき、教員として必要な実践的指導力を身に付けることができます。

企業就職についても、2・3回生対象に単位認定を行う㈶コンソーシアム京都によるインターンシッププログラムがあり、様々な企業や公的機関の仕事を体験することができます。

写真5　学生課窓口

「就職·キャリア支援センター」の次のゾーンとして就職·キャリア支援センターと関係が深い学生課が隣接して配置されています。

①番窓口は、奨学・就職支援グループで、就職（教員就職を含む）、授業料免除、奨学金等が主な業務内容となっています。

②番窓口は、学生支援グループで、課外活動、傷害保険、学生証、アルバイト、学生生活上の相談、学生寮、住所変更等、下宿等が主な業務内容となっています。

③番窓口は、学生支援グループ（国際交流担当）で、外国人留学生、外国への留学、国際交流に関する業務が主な業務内容となっています。

小中一貫学校がスタートしました

京都教育大学附属京都小中学校副校長　橋　本　雅　子

本校では、平成15年度より文部科学省研究開発指定を受け、「9年制義務教育学校設立に向けた小中一貫教育システムの確立」をテーマに研究に取り組んできましたが、今年度より正式に、小学校課程と中学校課程を一貫して学校名を「附属京都小中学校」（通称）と称し、小中一貫校としてスタートしました。新しい校歌をつくるプランもありましたが、長年続いた小・中の校歌をなくすのは忍びないことから、それぞれの校歌の学校名を「京都♪小中学校～♪♪」と歌い伝統を継承することになりました。制服についても、保護者からのアンケート結果を参考に、これまでの制服のデザインを一新し、5年生から制服を導入しました。5・6年生の制服は、制服の導入期と捉えて、「選択指定品」から自由に組み合わせて着用できるものにしました。

小中一貫校になり、いろいろな行事の見直しをしています。その中でも、小中一貫学校だからできる1年生～9年生の行事も実施しています。その一つを紹介します。

5月7日（金）には、1年生～9年生が集う全校対面式を行いました。2年生～8年生が体育館に集合した時点で、9年生が1年生と手をつなぎ、入場してきます。9年生は、1年生と対面し、ペアをつくり手をつなぐと「小さい」「かわいい」という声が上がりました。すっかり頼られた9年生は、はつらつとした態度で親が子をあやすように笑顔で対応しました。その姿は、教室の授業ではなかなか見られない輝いた姿でした。そして、1年～4年（初等部）・5年～7年（中等部）・8年、9年（高等部）それぞれの代表が挨拶をしました。高等部9年生の挨拶では、「初等・中等部の皆さんは、高等部の人のすばらしさを身近に感じ、目標にしてください。高等部の皆さんは、自分の幼い頃のことを思い出し、下級生に優しさをもって接し、見本となる行動を取ってください。」と1年生～9年生のつながりを意識した立派な挨拶をしました。

そして、8年生から1年生へリボンのプレゼントをしましたが、同じ視線になってリボンを胸につける姿には、優しさが伝わってきました。

この他、1年～6年の縦割り活動、7年～9年の合唱コンクールや球技大会、5年～7年の水泳大会や総合的な学習、そして全校生徒のスポーツフェスティバル「紫翔祭」や附属フェスティバル「紫友祭」など異学年の連携や協力、団結を図る行事を実施していきます。

このような行事を通して、小中ギャップが解消され、豊かな感性や人間性の育成に繋がることを期待しています。

全国インターハイ3位入賞（全国高等学校総合体育大会、陸上競技）

附属高等学校副校長　斉藤正治

標記大会が7月29日から8月2日に沖縄市で開催され、本校陸上競技部3年生山本遥選手は女子100mハードル決勝（8月2日）において、13秒68（追風2.6m）で3位に入賞しました。陸上競技に取り組む高校生の最大の目標である同大会において、追い風参考記録ながら自己記録を更新し、1位と100分の5秒の僅差で上位入賞するすばらしい成績をおさめました。

＊しかし、彼女にとっては口惜しい3位。

大会前の記録13秒82は全国ランキング2位、当日のレースは予選13秒99（追風1.5m）全体で1位、準決勝13秒96（向風1.5m）全体で2位と島風をものともせず好調でした。決勝では6台目のハードル（全10台中）を越えたあたりからから抜け出して8台目までトップを走っていましたが、9台目でバランスを崩し減速して追い越され、あと少し逃げ切れませんでした。2台目で隣りの選手と手が当たって、いつもの前半の加速が出来なかったのか、（中盤のリードでは）『何とかしないと追い抜かれるかも』と焦りが走りを乱したのかわかりませんが、先行逃げ切り型の彼女が見せたことのない納得いかない内容で負けてしまったことが「口惜しい」の最大の理由でしょう。

＊特別な大会

彼女は入学後も主要大会で立派な成績を残していますが、実は紆余曲折がありました。最たるものは、2年生の6月、全国インターハイ近畿地区予選会直前に怪我（肉離れ）して出場さえ危ぶまれるなか、決勝では自身初の13秒台13秒88で見事2位に入賞しました。その記録が評価されて世界ユース陸上競技大会（7月イタリア）の日本代表に選ばれ、その約3週間後、初の全国インターハイに臨みましたが、いずれも予選を通過することができませんでした。国際大会と全国大会に出場しながら怪我のため不満足な結果しか残せなかったことは、どれほど残念だったか知れません。そのシーズン後半の近畿大会では、その年に6月に勝っていた他府県の選手に負け、10月の国体では自己記録に遠く及ばず、走っても記録が出ない大変つらい後半戦を経験しました。

そのシーズンが終わりその後の冬季練習では、「臥薪嘗胆」、入学以来欠かさず続けてきた早朝練習に一層励んで怪我をしない体をつくりあげ、走力アップのため男子部員と競争するなど、ともに支えてくれた仲間とともに、熱い「思い」と大変な努力で冬を乗り切りました。そして迎えた今回の全国インターハイは、「特別な」大会であったのです。

＊環境、オール京教、そしてこれから

彼女は本学附属幼稚園から附属桃山小、中学校を経て14年目の京教生活です。中学ではバスケットボール部でしたが、才能を見抜いた同校の先生（本学陸上競技部OB）に勧められて始めた100mハードルで全日本中学大会7位入賞をはたしています。また、本校陸上競技部は週に2回本学400mトラックを使用させていただき、府内の高校としては恵まれた練習環境にあるなど、オール京教の環境が育てた選手といえるでしょう。

全国インターハイ1週間前、酷暑の練習後彼女の負担を減らすべく「グラウンド整備は下級生に任せたら」との忠告に「大丈夫です」と、いつものように黙々と400mトラックをブラシ掛けする平常心。瞬発力、敏捷性等ずば抜けた運動能力。ランニング中に滑らかに重心を移動させる非凡なバランス能力など間違いなく「逸材」です。

2010年8月3日京都新聞

決して特殊な練習を課してはいません。非凡な逸材が平凡な練習に非凡な努力で取り組むことで達成した今回の「偉業」。彼女の今後の活躍を期待せずにいられません。

写真は、在沖縄米海軍病院医師で下見・本番ともに案内・サポートしてくれた本校陸上競技部OB、支援に駆けつけた部員、そのOBの紹介でサポートしていただいたトレーナーさん

ロボカップジュニア世界大会3位（サッカーチャレンジAセカンダリー部門）

附属高等学校副校長　斉　藤　正　治

6月19日（土）関西空港出発。ロボット本体やノートPC等怪しげな荷物ばかりを機内に持ち込んだので出国の手続きでかなり厳しいチェックを受けました。シンガポールに向かって午前11時に出発しました。田中駿祐（3年）、山岸信博（1年）、中野哲也（今春3月卒業）の3君はプレゼンテーション用のパワーポイントの仕上げを機内でしていましたので、あっという間に到着したという感じでした。

到着後関西在住のロボカップ参加者のみで夕食をとりながら親睦会が開かれ、皆で名刺の交換などをして交流をはかりました。

20日（日）大会準備日。試合に先立って審査員によるインタビューが密室で行われました。これは本当にロボット本体や動かすためのプログラムを自分たちで作ったのかどうかをテストするためのものです。英語で質問され英語で答えなければいけません。本校の3人は英語で説明することが難しい部分を紙やPCで用意し無事合格しました。

夕食は屋台の集合体からなるフードコートへ行きました。いくつもある屋台の中から自分の食べたいものを選べるので便利でした。しかも安くて旨い、最高でした。写真はその時の食事の様子を撮ったものです。また、食事の間頭の真上に月があったのでここは赤道直下の国なんだとあらためて思い知らされ感激しました。食後、会場にもどり明日からの試合に備えて深夜までロボットの調整を入念に行いました。

21日(月)～23日(水)予選。本校はサッカーチャレンジAセカンダリー部門に出場しました。2対2のロボットによるサッカーの試合です。リモコンで操作するのではなく、一度スイッチを入れた後はロボット自身で判断して相手のゴールに向かってボールを蹴り込むものです。本校のロボットは方位センサーと赤外線センサーを搭載しており、競技に用いられるサッカーボールは赤外線を放っています。本校のプログラムは大変丁寧なつくりになっています。田中号がキーパーロボットで、山岸号が攻撃ロボットという基本陣形プログラムになっていますが、敵の放ったボールをキャッチした田中号がボールを持って敵のゴールに向かっていくと山岸号がその間ゴールを守ります。実際の試合では、田中号がボールを持って右サイドを上がって行き敵のロボットを引き付けておいて、左サイドの山岸号にパスし山岸号がフリーな状態でシュートを決めるという出来過ぎの場面もありました。

大会は団体戦形式で行われました。組み合わせは抽選で決められました。基本的には3チームで1つのスーパーチームを構成し、他のスーパーチームと対戦するという団体戦形式です。

本校の初戦は対米国でした。本校は30対0で圧勝しましたが、同盟軍であるポルトガルとスロバキアが惨敗したため、団体戦としては勝ち点をもらうことができませんでした。米国チームはとても明るく楽しい人柄でした。アメリカンフットボールもやっているという超巨大な少年は試合開始時に日本語で「いただきまーす！」（日本を食ってやるという意味か？）と言ったり、試合終了後の挨拶では自分の腕力を大げさに見せ付けるような握手をしたりして楽しい雰囲気を作ってくれていました。

24日（木）決勝。クジ運が悪く団体戦のポイントを得ることができなかった本校ですが、チーム勝率の高い3チームだけが決勝トーナメントに進出できるというルールのおかげで決勝に進出することができました。そして準決勝で負けてしまいましたが、3位決定戦で勝利し世界3位のトロフィーを手に入れることができました。

キャンプ学習

附属特別支援学校副校長　春　原　克　彦

毎年、夏休みに入ると中学部1年生と高等部1年生が、滋賀県のマキノに、キャンプ学習に行きます。キャンプ学習は生活を通して学ぶという本校の学習スタイルの典型だと考えます。テントを張って寝場所をつくる。食事を作る。共同生活が営まれます。

生徒も教師も同じキャンパーとして一緒に生活するのです。

7月21日（水）		7月22日（木）	
9：15	南北自由通路階段下　集合	6：30	起　床
9：46	京都駅　発　ＪＲ湖西線	7：00	朝食・昼食準備
10：36	近江今津駅　着		朝食・片づけ・休憩
11：00	近江今津駅　発　貸切バス	9：00	散策
11：30	北マキノ　着		
	荷物を運ぶ	11：00	昼食
12：00	開設式（火おこし・旗あげ）	11：30	後片付け
	弁当・休憩	12：00	テント撤収
13：00	テント設営	13：00	閉設式
	川遊び	13：30	北マキノ　発　貸切バス
16：00	夕食準備	14：00	近江今津駅　着
	夕食・片づけ・休憩	14：27	近江今津駅　発　ＪＲ湖西線
19：45	キャンプファイヤー	15：32	京都駅　着
21：30	消　灯	15：45	南北自由通路階段下　解散

キャンプ場に荷物運び

火をおこします

かまど番

川遊び　滝で汗も流します

夕飯　カレー作り

上の表は、今年の日程表です。猛暑の中、みんなで一泊二日の生活をつくりました。生徒も教師も充実した2日間を過ごせました。

新任の先生から

教育学科准教授　伊　藤　崇　達

本年4月に着任いたしました伊藤崇達と申します。3月までは愛知教育大学に勤めておりましたが、縁あって出身地の関西に戻ってくることとなりました。

私の専門は、教育心理学・発達心理学という領域になります。幼い子どもは好奇心が旺盛でエネルギーに満ちています。未知の世界にもどんどんと挑んでいこうとするパワーをもっています。そうした力をベースにしながら、学校生活を通じた成長の過程を経て、自己なるものができあがっていき、一人ひとりの学びのスタイルとでも呼べるものが確立してくるように思います。

こうした発達のプロセスをふまえて、子どもたち一人ひとりが主体となって自らの学びを自ら舵取りしていくあり方とはどのようなことか、このような力をいかに支えていけばよいか、心理学の立場からできることとは何か、そういったことを考え、日々、研究に取り組むようにしています。

教育学部の学生だった折、心理学とともに、社会科、歴史の教員になることにあこがれた時期があります。そうしたことからも、京都教育大学に勤めさせていただくことはとても光栄なことで、また、京都という土地にも大きな魅力を感じています。学生さんとともに自らも成長していけるよう、また、童心のように学びを楽しむ心持ちを忘れず、好奇心を失わず、教育・研究に携わっていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

家政科准教授　深　沢　太香子

平成22年4月1日付けで、家政科　被服学担当の教員として着任しました。どうぞよろしくお願いいたします。しばらくの間、福岡にて研究・教育生活を送っておりましたが、このたび、学生時代を過ごした懐かしい関西に戻ることができたことを嬉しく思います。同時に、「謎解き」のおもしろさを教えてくれた大学時代の恩師とゆかりのある京都の地に赴任できたことにも不思議なご縁を感じています。

私の担当する「被服」とは、人間にとって最も身近な存在（環境）です。在って当然のモノとして思われています。しかし、実際には、解かなければならない興味深い「謎」がたくさんあります。それらの「謎」に、ヒトの生理・心理特性を扱う人間工学の視点から迫ることで、ヒトの生命活動や人間の日常生活において衣服の果たすべき役割を、学生の皆さんに理解してもえるように接していきたいと思います。そして何よりも、被服における謎解きのおもしろさ、素晴らしさを学生の皆さんと共有して、そのおもしろさや楽しさを、さらにこども達にも伝えられる教員の養成に努めたいと思います。

壁をのりこえて

京都市立安朱小学校教諭　岡　田　亜　希
（英語科教育専攻　平成20年度卒業生）

京教を卒業して2年。私は現在、小学校で子どもたちと毎日楽しく過ごしています。

子どもたちは朝からエネルギー全開で、私も自然にスイッチが入ります。他愛もない話に大笑いし、子どもの成長に感動し、日々充実しています。しかし、担任としての責任も重くのしかかります。教材研究、生徒指導、家庭との連携、研修など、こなすべきことが山積みで、毎日あっという間です。思いが伝わらずに悔しくなったり、授業や指導がうまくいかずに自信をなくしたり、何度も壁にぶつかってきました。それでも、子どもたちのきらきらした笑顔に励まされ、教師になってよかったと心から思います。

京教では、教職の基礎や指導案作成といった実践的なことを学びながら、英語を専門的に勉強しました。ボランティアや学校インターンシップなど、どんどん学外に出て現場経験を積んだことも私の土台になっています。大学にいるだけではわからない現場の苦労や喜びが見えてくるのです。大学のゆったりとした時間の中で、自分と向き合い、いろんな経験を積む中で、同じ夢に向かって支え合える仲間にも出会えました。今でも互いの近況を語り合える仲間がいることは大きな力になります。

大学での日々は、すべて現在につながっています。ぎこちなかった模擬授業も、実習での日々も、レポートや予習に追われたことも、その時があって今の自分がいます。教師になる上で、自分の苦手や課題がたくさん見つかりました。そして、苦労しながらいろんな壁を乗り越えてきたことは教師になった今でも大きな自信になっています。今後も、目の前の子どもたちのために、壁を乗り越え、よりよい教師になっていきたいと思います。

立場が人をつくる

附属京都小中学校社会科教諭　西　田　直　記
（社会科教育専攻　平成21年度卒業生）

附属京都中学校で社会を教え始め、今年で2年目になる。本校は、2010年から小中一貫校としてスタートしたので、今年から『附属京都小中学校』に勤めている。右も左も分からず始まった教師生活。あっという間の2年間を振り返ってみて、ふっと浮かんできた言葉がある。「立場が人をつくる」という言葉である。比較的、一般に広まっている言い回しだと思う。

プロ野球といえば厳しい実力社会で、個々の実力に見合った給料が渡される。そんなプロスポーツの世界であれば年俸の総額がそのままチームの強さに反映されそうに思える。しかし、必ずしも資金が潤沢なチームが優勝するとは限らない。何故か。それはエースというポジションはチームに1つなので、エース候補をいくら集めようと、そのエースという役割と責任を背負わさなければ、それにふさわしいプレーができないのだそうだ。

私も2年前まではあまりよくできる学生でもなく、教育実習ではとても苦労していた。それでも2年間何とか教師としてやってこられたのは、周りの先生に助けられ、教えていただきながら、教師という仕事がこなせるように背伸びして必死に勉強してきたからだと思う。今でもまだまだ力不足で、毎日が勉強である。

そう思うと、「まだまだ勉強も出来ないし、まだ教師にはなれないかな」「もっと勉強してから採用試験を受けようかな」、などと思っていた私の背中を押してくれた先生の言葉がなければ、今でも勉強せずにふらふらしていたかもしれない。なぜなら、もっと勉強してから先生になろうという思いは半分は真剣な思いだが、半分は逃避だったからだ。「迷っているなら、やりなさい」「何をしてもいい、何でもいいから今すぐに始めなさい」という先生の言葉があったから、今の自分があるのだと思う。

気づきから学ぶ

昭和38年度　第二社会学科卒業　京都教育大学同窓会事務局長　**市　原　時　夫**

私が、京都学芸大学（現　京都教育大学）に入学したのが、昭和35年。この年は、安保阻止のデモ、全学連の活発な活動、炭鉱の相次ぐ事故、など暗いニュースがあり、一方、カラーテレビの放送開始、ダッコちゃんブーム、インスタントラーメン、コーヒーなど、戦後の苦しい時代から、経済・産業が徐徐に成長しようとする時代でもありました。自宅の近くの熊野神社から市電（路面電車）に乗り、三条から京阪電車で藤森駅への日課でした。

当時は、京阪も路面を走り、鴨川の桜並木や四季折々の風景を楽しみながら通ったものです。

学芸大の校舎は兵舎の跡で、モルタル木造と思われる二階建ての建物。学校全体としては野原の中に建物が点在した感じで、グランドも今より小さかった。他の大学のように鉄筋の立派な校舎でなくても、廊下がギシギシ鳴ったり、戸がうまく開閉できなかったけれど愛着を感じた。校舎の周りも以外とすっきりとし、ごみも無く野原のようで見通し風通しが良かった。

入学当初はまだ入部するクラブも迷っていました。当時の南門（現在の正門）の横にテニスコートとバレーボールのコートがあり、その練習風景を見ながら何となく歩いていました。すると突然「ちょっと君」と呼び止められ、いきなり「バレー部に入部しないか。」「高校は？」「鴨沂です。」その先輩は「私も鴨沂や」、ニコニコして「バレーどや」「明日から来て」矢継ぎ早のその言葉に動かされました。きっと私の心の中にも、「バレーでも入ろうか。」という気持ちがあったのでしょう。それが私のバレーボールとの出会いでした。その当時のバレーボールは、日本では9人制の野外競技でした。雑草を抜きコートを均し、練習に入る。用具のボールはゴムチューブに革のカバーに覆われており、チューブに空気を入れしっかり閉じた後、革のカバーを革の紐で丁寧に閉じる。ボールは貴重な用具。練習の後は、布で丁寧に拭き少し空気を抜いて保管する。1個でも紛失することがあれば、見つかるまで全員で探す。このようなことを通して物を大切にすることや、人が物に対しても心をこめて扱うことのすばらしさや優しさを学んだように思われます。

当時、アルバイトをして、本代やクラブ費を、中には学費までもそれで賄う学生が多かったものです。私も色々なアルバイトをしました。家庭教師は週二回は定番です。その他、中央市場のセリのための品物並べ、家庭の大掃除の手伝い、学校のストーブの煙突掃除、祇園祭の鉾引き等々。中でも中央市場のセリの為の野菜並べは大変でした。朝五時には市場に入り八時に終わる。真冬の寒さの中を自転車で通いました。野菜を並べるのには随分神経を使います。並べ方が歪んだり、向きが違ったりすると酷く叱られました。そこでは売る側の人、買う側の人の真剣な様子が伺えます。物を見極め即座に決めるその張り詰めた空気に仕事の厳しさと同時に感動を覚えました。

私の専攻は東洋史で、荒木敏一教授です。大学内で有名なハスキーボイスですが、話し方は柔らかく解かり易くて好感が持てました。私たち専攻生は土曜日や日曜日に中国に関わる美術館や寺院等を見学し教えて頂きました。

地理の水山教授にも親しくして頂き、校内で出会うたびに「バレーは頑張っているか」「私の講義は出なくても良い。図書館で勉強しなさい。」「君の苗字は丹波の豪族にあるなあ」等々声をかけてもらいました。後年、地理の専攻生と共に私の新任校の久多小学校へ訪ねて励ましていただきました。

就職は勿論教師の道へ。

この当時は京都市の採用はありませんでした。仕方なく大阪府の採用試験を受けることに決めましたが、突然大学の学生課から京都市に採用があると電話連絡がありました。幸いにも合格でき京都市の教員として採用されました。

いよいよ辞令。「久多小学校へ勤務を命ずる」

当時の新採は僻地校と決まっていました。しかし、私は久多がどこにあるか全く知りませんでした。左京区の北の端と聞いていましたが、市内の地図には載っていません。着任の前日、学校長より「長靴を履き、傘を忘れないように」と連絡がありました。当日学校長と三条の京都バスの停留所で合流し、三条から梅ノ木まで2時間程掛かりました。梅ノ木のバス停から徒歩で7キロ久多中ノ町まで杉の木立に囲まれた道を川沿いに歩きます。道は雨でぬかるんで傘と長靴は大いに役立ちました。

久多小学校（現在閉校）は当時複式学級でした。音楽、図工、体育は2学年一緒に同じ教材を学習をし、4教科の学習は学年に沿った内容を同じ教室で教えました。その為毎時間のプリントは欠かせませんでした。忙しく慌しい毎日でしたが、久多の自然と純粋な子供たちの心に癒されました。緑の山々、清流小鳥のさえずり、虫の声、冬には1メートルほどの積雪。秋の山一面の紅葉。夏の涼しさ。四季折々の楽しみがありました。

「気づき、考え、行動する」これは私が長年関わったJRC（青少年赤十字）のモットーでもありますが、今までの色々な人たちとの出会いや自然との触れ合いを通して、そこで気づき、考え行動することは人の成長にとって大切なものと考えています。日常の何気ない暮らしの中にも、一見無駄だと思われる事の中にも、新しい気づきを発見したいものです。

第 126 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。
より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。
広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522
京都市伏見区深草藤森町 1 番地
京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」
E-mail：kouhou@kyokyo-u.ac.jp

126 号編集後記

広報紙「KYOKYO」第 126 号をお届けいたします。本号の特集は『京都教育大学地域スポーツクラブ』です。

京都教育大学地域スポーツクラブは、平成 20 年 4 月から京都教育大学地域スポーツクラブとして正式に活動を開始し、事業はスポーツ教室として小学生向けの陸上競技教室、サッカー教室、成人向けのランニング教室等、イベントとして駅伝大会を実施してきました。

学校や職場の枠を越えたスポーツ好きの人々が、京都教育大学でともにスポーツを楽しみ、汗を流します。基礎的な運動能力を身に付ける場として、新しい友との交流の場として、未来のアスリートを目指すトレーニングの場として、活用して頂くことを願っています。

なお、今号の表紙を飾るのは附属桃山中学校の林実希さんの作品、裏表紙は同じく桃山中学校の海道世里奈さんの作品です。力強く、しっかりと桃山城の特徴を捉えた作品をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長　武蔵野　實

京都教育大学

地域連携・広報委員会

委員長	武蔵野　實			
副委員長	相澤　雅文			
委　員	饗場　知昭	田中　里志	浅井　和行	延原　理恵
	岡田　直樹	荻野　　雄	奥村　真紀	富家　健治
事務担当	企画広報課			

京都教育大学広報 第126号

発行日
2010年10月29日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
http://www.kyokyo-u.ac.jp/